

朝鮮文学長編小説『太平天下』『三代』『動く城』
の日本語翻訳について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎮 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007320

朝鮮文学長編小説『太平天下』『三代』 『動く城』の日本語翻訳について

南 富 鎮

以前の2008年、筆者は「朝鮮文学長編小説の日本語翻訳について」という書評のようなものを書き、いくつかの作品と訳者を紹介した。白川豊訳・廉想渉『万歳前』（勉誠出版、2003年）、牧瀬暁子訳・朴泰遠『川辺の風景』（作品社、2005年）、波田野節子訳・李光洙『無常』（平凡社、2005年）、大村益夫訳・姜敬愛『人間問題』（2006年）と平凡社による翻訳企画である。そして文章の最後に「はたして朝鮮文学の翻訳は日本で安定的な読者層（商業性）を獲得できるのだろうか」という期待と不安を述べたことがある。出版状況の厳しいなか、平凡社による翻訳企画がはたしていつまで続くのか、また商業性を獲得できるのかという憂慮があったからである。当時は「冬のソナタ」現象の絶頂期で、また「韓流」なるものも流行りだしていただけに、韓国への関心が朝鮮文学にも広がってほしいと期待した。しかし、その期待はいまだに満たされずにいる。

速成乱造された「韓流」は日本で人気を博し、K-POPや韓ドラと称するものが日本の表舞台で大いに活躍したが、朝鮮文学への関心は依然として振るわないままであった。日本のテレビで八等身の母国の美男美女が歌や踊りを見せるたびに、チャンネルを替えるなどした。いずれ大きな文化的摩擦を起こし、その反動で最悪のしっぺ返しが予想されたからである。幸いに、あるいは不幸なのかもしれないが、予感的中して2012年の夏から勃発した島嶼をめぐる政治問題で、日本での「韓流」はすっかり下火になった。正直、筆者はほっとしている。

筆者の時代へのこうした個人的な思いはともかく、大衆芸能文化が氾濫する時代相の中で朝鮮文学長編小説が日本で翻訳され始めた。大衆芸能の圧倒的な威力の前に、活字離れが深刻な中での出発であった。またそこには、幻想的で現実離れした韓流ブームとは対照的な姿がある。植民地期の悲惨な現実と哀れな民族の姿、成熟したとはいええない言語と文学、薄弱な思想性とストーリー性、近代と反近代の間で彷徨う人間像などが露骨に見られるが、筆者はそれが韓国

の原風景により近いと思っている。自慢できるようなものではないが、本質がそうであるから仕方がない。「韓流」の根幹にある韓国のこうした原風景が現代日本で受け入れられるか、危惧していた。おそらく誰も見向きもせず、放置され、平凡社の翻訳企画は中絶するだろうと思っていた。しかし、手元には翻訳本が途切れながらも届いた。

前回の書評以来、筆者に届いた平凡社の翻訳本は3冊ある。うち長編小説は2冊で、短編翻訳集が1冊である。短編翻訳集は以前の『無常』の訳者である波田野節子氏による『金東仁作品集』（2011年）である。金東仁の代表作「ベッタラギ（舟唄）」を含む計12編の短篇を翻訳収録したもので、日本での金東仁文学の集大成といえよう。「ベッタラギ」という舟唄の訳出に波田野氏の力量が遺憾なく発揮されているが、短篇集なのでこれ以上は述べない。以下、長編翻訳において対照的な2作を簡潔に紹介しておく。2作は訳者の翻訳態度や翻訳行為において根源的な相違が見られ、よい対照になっている。

布袋敏博訳・蔡萬植『太平天下』（平凡社、2009年）は植民地期を生きる一家庭の様子を描いた蔡の代表作である。植民期の様々な矛盾と複雑な社会層が風刺的に描かれており、今日の若い読者の歴史観からすると内容にやや違和感があるかもしれないが、歴史的な神話を取り除いた生の風景が赤裸々に提示されている。しかし、翻訳となると原文は全羅道の訛りが激しく、主人公の朝鮮的な特徴を訳出するのは至難だろうと思われた。しかし、布袋氏の翻訳はそれらのすべての問題をクリアしたまさに見事なものであった。全羅道の方言を関西方言に移し換え、関西方言の漫才や落語の軽妙な語り口を巧みに利用し、登場人物の個性的な発想と言葉を手に取るような感じで訳出している。関西弁の環境に親しみ、それを使いこなし、落語や漫才によるリズム感を体得していなければ不可能な作業である。一つの言語をこれほどまでに的確にその雰囲気や気分や空気まで移し換えることが可能なのかと思い、正直に驚いた。布袋氏には本人が気づいてないかもしれない文学的才能が大いにあると思った。原作はよい訳者に巡り合うことで運命が決まるといってよい。『太平天下』が日本語訳者の布袋氏に巡り合ったことは幸運だったのかもしれない。翻訳作は朝鮮文学としてだけではなく、関西弁の絶妙なリズムの面白さだけでも十分に楽しめる。作品内容と翻訳の妙味を象徴する部分を引用しておく。

「火賊の輩がおるゆうんか？ 泥棒みたいな守令らがおるんか？……財産があったところでそら盗人のもんで、命は蠅の命みたいやった末世の時代

は、とおに過ぎたんや……、見てみい、街の角々には巡査がおって、くのに津々浦々にいたるまで、公明な政治（まつりごと）、何ともええ世の中やで……日本は兵隊を数十万動員してやな、わしら朝鮮人を保護してくれとるんやから、何とも有難い世の中やで？ 違うか？……自分のもんを自分の手にして気楽に暮らせる太平の世の中、これを太平の天下ゆうんや、太平天下！……ほんで、こんな太平天下の世に生まれた金持ちの子ならやで、なおのこと大いばりで贅沢して、楽に生きてらええやないか。何でまた世の中を滅ぼすようなごろつきどもに関係しよるゆうんや、ええ？」

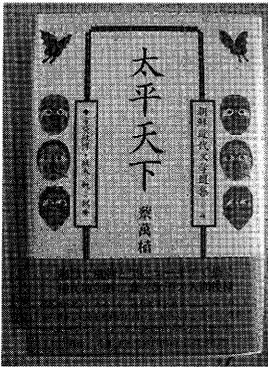
白川豊訳・廉想渉『三代』（平凡社、2012年）は布袋氏の訳とは対照的なものである。布袋氏の訳が原文の朝鮮語をいったん溶鉢炉に入れて完全に溶かした後、それを日本語の鑄型に注入して新たに作り直したものであるとすれば、白川氏の訳『三代』は原材料を生のまま鍛造し、日本語の形態に叩いて成形した印象である。そのため、原材料が透けてみえる。訳文を読むと元になった朝鮮語の原文がそのままの順序で思い浮かぶのである。限りなく丁寧な直訳である。朝鮮語の語順と息遣いまでが伝わるが、それはあくまでの朝鮮語が可能な読者に限るのかもしれないと思った。自己を抑制し、原文に徹底的にこだわり、一寸の狂いもなく、一滴の漏れもなく、すべてを日本語に置き換えているのである。白川氏の以前の訳著『万歳前』もそうであるが、白川訳の特徴は氏の一流研究者としての緻密さにある。

『三代』はたいへんな長編で、平凡社版でも上下2段組みで500頁を超える。筆者は韓国の大学時代に『三代』の読破に挑戦したがそのあまりの冗長さに耐え兼ね、途中で投げ出した覚えがある。今回、日本語で再挑戦したが、以前よりは遥かに読みやすい感じであった。冗長な文章による内容の停滞、論理の飛躍と不明瞭さが白川氏の翻訳過程で丁寧に修正され、濾過された感じであった。日本語を通して原作の化粧直しが施されたような印象である。『三代』は題目からの印象とは違い、島崎藤村『夜明け前』のような世代を挟む長い時代設定ではなく、3世代同居家族（実は4世代同居家族）の一時を捉えたものである。原作に対してはその辺の不満を筆者はつねに持っているが、冗長で停滞する内容と文章を一々丁寧に翻訳した白川氏の根気には頭が下がる。朝鮮文学が心底から好きでないとできない作業であろう。朝鮮語を勉強し、翻訳を目指す人達のためにはよいテキストになるだろうと思った。その逆もありうる。

平凡社による翻訳企画ではないが、もう一つ紹介したいのは芹川哲世訳・黄

順元『動く城』（日本キリスト教団出版局、2010年）である。黄順元の長編小説が日本語で訳されたのはこれが初めてである。作品はキリスト教の信仰心を基本ベースにし、それが伝統的な巫俗信仰や儒教思想と葛藤する様態を描いたものである。キリスト教と伝統思想との摩擦は『三代』でも扱われているが、これは朝鮮近代文学の大きなテーマでもある。筆者は、朝鮮のキリスト教とシャーマニズムや儒教との対立、信仰心をめぐる煩悶や思想的想念には朝鮮の朱子学正邪論や道学論の伝統が強く影響していると思っている。また同作からは三浦綾子『氷点』の影響と思われる共通した思想性も感じられる。『氷点』『動く城』での信仰的葛藤は東アジアにおけるキリスト教の受容に類似した思想形態が感じられる。翻訳は、おそらく敬虔なキリスト教信者であり、異国暮らしの筆者のこともたびたび心配してくださる氏の温厚で柔和な性格を反映するソフトな文章である。労作であることは言うまでもない。

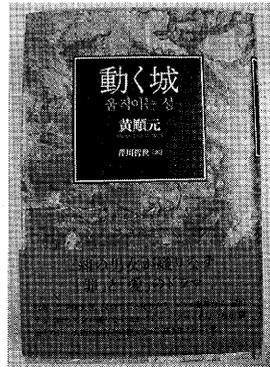
以上、朝鮮文学長編小説3作を簡略に紹介したが、ほそぼそではあっても今後も翻訳作業が継続してほしいと思う。同時に平凡社による翻訳企画が最後まで完成されることを祈る。そのためには日本の読者による一読がなによりも望まれる。（終）



布袋敏博訳『太平天下』



白川豊訳『三代』



芹川哲世訳『動く城』